

MOT 勉強会レポート第 1 回 「知的財産コンサルティング活動について」

1. はじめに

「MOT 勉強会」は、平成 21 年より MOT 修了生が中心となって開始した自己啓発の場としての勉強会です。その後は修了生以外でも思いある方が参加できるようになり、年 10 回のペースで各種の話題をテーマに取り上げて開催してきました。

当コラムでは、「MOT 勉強会」での講演・意見交換の様子を簡単に紹介させていただきます。

連載の第 1 回目となる勉強会は、さる 1 月 16 日(土)、田町 CIC キャンパスイノベーションセンターで開催されました。

当日は、折しも大学入試センター試験の初日で、同じ敷地内が試験会場になっていたこともあって、比較的部外者の出入りの少ない静かな環境で開始することができました。

講師に戦略データベース研究所所長(元東京農工大 MOT 教授) 鶴見先生をお迎えして、「知的財産コンサルティング活動について」というテーマで講演していただきました。

参加者の中には、経営コンサルティングという職業に関心が高い人が多いのではということで、このテーマになったそうです。

2. 講演内容

3 時間の講演は前半と後半とに分かれ、講演案内には

(1) 知財コンサル 5 年間の歩み

2010 年 11 月に知財コンサル会社を設立して以来、どのような活動を進めてきたか、その実態についてご紹介します。

(2) 三位一体の経営戦略論について

知財コンサル活動を進めながらまとめ上げた三位一体の経営戦略論(戦略の策定と推進に関する方法論)についてご紹介します。

と書かれていました。

2.1. 知財コンサル 5 年間の歩み (講演前半)

2.1.1. 活動の場

鶴見先生は、2011 年に東京農工大学大学院を退官された後、民間の知財コンサルタントとして活動されてきました。

鶴見先生が知財コンサル活動のベースとしているのは、

① 「戦略データベース研究所」

<http://sdb-ri.com/index.html>

② 「知財デザイン」

<http://www.ip-design.co.jp/index.html>

の2社での活動です。

前者①は、退官と同時に鶴見先生ご自身が設立した会社で、鶴見先生の提唱する「三位一体の特許情報活動」の企業内に定着させることを主眼とした会社で、鶴見先生の軸足ともいべき会社です。

後者②は、先生のかつての教え子の川上成年氏(弁理士)が設立した会社で、中小企業を対象にしたプログラムが特徴です。

2.1.2. コンサルティング技術の肝 ～ 「三位一体の特許活動」

「三位一体の特許活動」は鶴見先生のコンサルティング活動の中核をなす考え方です。鶴見先生は、長年に渡り旭化成で開発者として従事し知財管理を主導された後、東京農工大学で更に研究を進めてこられました。その主張に説得力があるのはそれらの実務経験・成功体験から得た知見が根幹となっているからであり、それは先生のゆるぎない信念に なっています。

三位一体の特許情報活動のポイントは、三段階でまとめられており、

ポイント 1. 三位一体の協力体制で推進する

(研究者+知財担当者+特許情報担当者)

ポイント 2. 全てのテーマについて LDB(Local Database)を構築する

(研究開発に必要な訴求調査と継続調査を経て得られる特許情報)

ポイント 3. 重要テーマについては SDB(戦略 Database)を構築する

(用語の統一:LDB をシソーラス化し、事業戦略上必要な付加情報を入力した情報) となっています。

個々の段階を達成させるためには、人材の教育・訓練そして意識改革、そして多くの精緻な手順を経た、調査・解析・検討が必要で、それらが全て「三位一体の特許情報活動」の中に体系的にまとめられています。

LDB と SDB については、後半の講演の中でより戦略的な構築と活用が提示され、新規事業の成功に必要な不可欠な要素であると強く感じました。

2.2. ビジネスモデルをベースとする戦略策定方法 (講演後半)

～ 1年 365日紙飛行機を受け身で待っているのはダメ

先生が講演の中で引用した NHK の朝の連ドラのテーマソングですが、知財部門たるもの事業部門・開発部門から飛んでくる特許調査依頼(=紙飛行機)を受け身で待っているようではダメで、より積極的に開発の早い時期から事業部門に絡んで行くべきであるということ を力説されていました。

2.2.1.事業計画に連動した知財計画の立案

「三位一体」を組織レベルで捉えると、事業部門+開発部門+知財部門という組み合わせが考えられますが、鶴見先生が「事業部門を巻き込まずして知財部門のみで会社の特許情報活動を主導することは不可能である」とまでおっしゃっていたのが印象的でした。

鶴見先生の提唱する「ビジネスモデルをベースとする戦略策定方法」は、全社戦略から説き起こして、事業戦略の策定に焦点を当て、新規事業のビジネスモデルを構築しつつ、「事業・研究開発・知財計画の立案と推進」につなげていこうというダイナミックなアプローチです。知財部門がこうしたアプローチをとることで、事業部を事業計画の早い時期から積極的に巻き込んでいくことができます。

2.2.2.戦略策定を支える知的財産活動

講演では、戦略策定サイクルと知財サイクルの相関の中で、知財の構築・保護・活用の各プロセスごとに検討すべき項目が論じられ、ビジネスモデルをサポートする最適なパテント・ポートフォリオを構築します。

LDB、SDBといった特許情報活動も、事業展開を目標にしてより戦略的に定義されます。

各論になりますが、興味深かったのは、ビジネスモデル構築の過程で使用した QFD(品質機能展開)の展開表をそのまま SDB の用語統一に使用したり、VE の機能展開を特許情報解析に活用するといった提案・試みです。製造や開発ではお馴染みの QFD や VE が特許情報活動の中で、こういう使われ方をするのかと思いました。

3.おわりに

講演内容はそのボリュームと深さから、とてもその全てをお伝えできませんでしたが、前段「活動の場」のリンク先ホームページから関連する資料をご覧いただき、鶴見先生の「三位一体の特許情報活動」を感じ取っていただければ幸いです。

尚、質疑応答は極めて、自由な雰囲気の中で行われ、

「仕組みづくりが大きすぎて、開発スピードに間に合わないのではないか」

「人工知能を活用するなどして、仕組みづくりを早めることができないか」

「事業部の要求に追従するだけで良いのか、先生のいつもの教えと違う」

「君がそう思うのは、私(鶴見先生)が君にそう教えたからだ」

といった率直でユーモアの溢れた意見交換がなされました。

これも、参加者相互の長年の間に培われてきた相互信頼の上に気づかれた雰囲気であると

思いました。筆者も、次回以降の参加がとても楽しみです。

(文責: 石垣純)